

高校生 のための

展示資料 50



神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

この資料は、高校生の皆さんに見学の手引きとなるよう作ったものです。当館には800点を超える資料が展示されていますが、そのうち高等学校での学習に関連の深い50点を紹介しています。いずれも神奈川の歩みを通して歴史を深く学べる資料です。

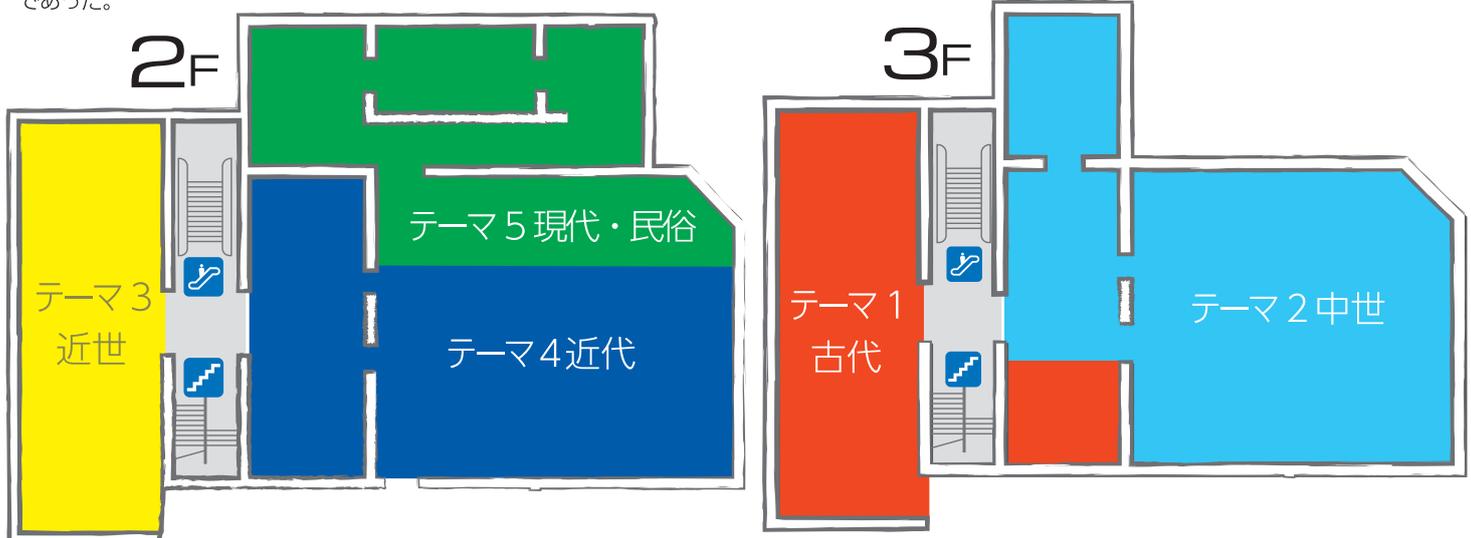
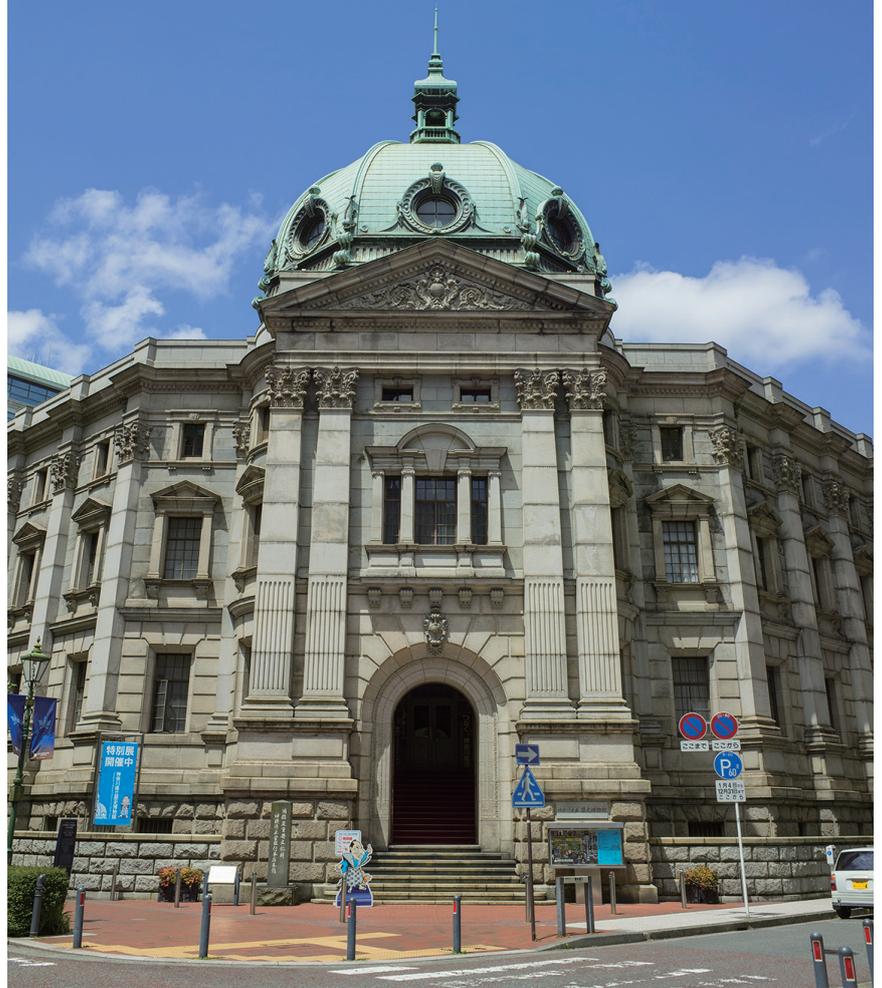
博物館での探究を通して、歴史の面白さ、奥深さを体感してください。

展示物保護のため別の資料が展示されている場合があります。



⑤0 横浜正金銀行

明治32年(1899)12月から建築工事を開始し、明治37年(1904)7月に完成。地下1階地上3階の造りで、正面屋上に巨大なドームをもち、外壁は花崗岩等で化粧し、コリント式の柱をめぐらせた建造物である。様式的にはネオ・バロックの影響を受けているといわれている。昭和44年(1969)3月に国の重要文化財、平成7年(1995)6月に国の史跡の指定を受けている。設計者は、妻木頼黄(つまきよりなか)(1859~1916)、工事監査は遠藤於菟(えんどうおと)(1866~1943)で、いずれも当代一流の建築家であった。



② 縄文時代の生活道具

土器の出現は、容器としてだけでなく、料理の道具として使用することで、食生活にも大きな変化をもたらした。土器に見られる形と文様は、地域や時期によってさまざまだが、縄文時代中期以降には、人の顔や蛇をかたどった把手(とつて)の付いた土器や釣手(つりて)土器、香炉(こうろ)形土器など、信仰または儀礼用と思われる特殊なものも作られるようになった。



③ 縄文時代の「あたま」

土製の大きな頭部の造形。縄文時代中期にはこうした「頭」の表現が多く見られるが、横浜市公田ジョウロ塚遺跡出土のこの資料は、その中でも最大級の大きさである。ただ、首より下が失われており、もともと何だったのか、実はよく分かっていない。端正でもあり、どこかあどけない愛らしさも感じさせる表情を浮かべる。



縄文時代中期

④ 弥生時代の生活道具

弥生時代には、稲作とともに新しい文化が伝播し大陸系の磨製石器や金属器(鉄や青銅製品)が新たに登場した。鉄製工具の使用によって木材の加工が容易になり、農具や繊維具を始めとする木製品の数が増えた。ただおそらく、鉄は一部の工具などに使われた程度で、道具の材料には依然として石や動物の骨・角なども多く使われていた。



⑤ ぼっこつト骨

獣骨(じゅうこつ)や亀甲(きっこう)を焼き、生じた亀裂、焦げなどの痕跡により吉凶を占う。三浦半島の海蝕(かいしょく)洞窟遺跡では多く発見されている。その風習は『魏志倭人伝』や『古事記』にも記載が認められる。

間口洞窟遺跡・毘沙門洞窟遺跡(三浦市南下浦町)
弥生時代後期～古墳時代後期

⑥ 三角縁神獸鏡(複製)

白山古墳(川崎市幸区南加瀬)出土
古墳時代 前期
原品:慶應義塾大学所蔵



⑦ 埴輪

馬形埴輪 向ヶ崎古墳(三浦市向ヶ崎町)出土
古墳時代 後期
勾玉 浅間森古墳(綾瀬市深谷)出土
古墳時代後期



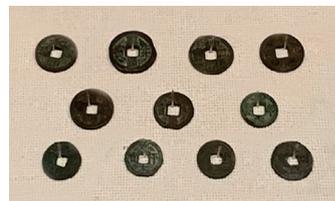
⑧ 高座郡衙の遺構からの出土品



茅ヶ崎市下寺尾の西方A遺跡では、高座郡衙(郡家)と推定される遺構が、隣接する七堂伽藍跡(下寺尾廃寺)では郡衙に伴う周辺寺院の遺構が発見されている。また付近には水辺で行われた祭祀場も存在する。

⑨ 皇朝十二銭

奈良・平安時代に中央政府が鑄造・発行した12種類の国産銭貨。東国では流通貨幣としてよりも、官人や地方豪族の権威の象徴として用いられたほか、まじないにも使われた。



⑩ 相模国分寺(復元模型)

奈良県の法隆寺と同じように建物が配置されている。この建物配置となるのは、全国の国分寺の中でも相模国と下総国の二例のみで、東西約240m×南北約300mの規模が想定される寺域は、全国の国分寺の中でも有数の広さである。塔の礎石の柱間から、高さ約65mの七重塔が建っていたと想定される。



ぐんが

⑫ 木簡(複製)

宮久保遺跡(綾瀬市早川)出土
奈良時代
原品:神奈川県埋蔵文化財センター保管



① 旧石器

日本列島で人々が暮らし始めたのは、今からおよそ35,000年前の旧石器時代と考えられている。当時の地球は最終氷期。平均気温は現在より7・8℃程低く、海岸線は大きく後退していた。この時代の遺跡は神奈川県でも多数見つかっているが、中でも相模川左岸の相模野台地に集中している。



13 円覚寺舍利殿 (実物大模型)

今の建物は永禄6年(1563)の円覚寺大火後、鎌倉西御門(にしみかど)にあった太平寺の仏殿を移築したもの。舍利殿と様式的に似た、東村山市にある正福寺地蔵堂に、応永14年(1407)の墨書銘が発見されていることから、室町時代の建立と考えられる。禅宗様成立の地、鎌倉における洗練された純粋な禅宗様建築としての価値はきわめて高く、国宝に指定されている。



14 宝城坊薬師如来 (複製)

宝城坊(日向薬師)は奈良時代の開創を伝え、鎌倉時代には源頼朝や政子も崇敬したことが知られる古刹。本群像には着衣部を中心にノミ跡が整然と残されている。こうした技法は鉞彫(なたぼり)と呼ばれ、中国地方から東国にかけて作例が知られる。



平安時代後期
原品：伊勢原 宝城坊
重要文化財

あかいとおどしよろい

15 赤糸威鎧 (複製)



原品は東京都青梅市の御嶽(みたけ)神社に伝わる平安時代後期の鎧で、畠山重忠所用の伝を持つ国宝である。胴全体は裾広がり安定感を持ち、大袖・鳩尾板(きゅうびのいた)・梅檀板(せんだんのいた)等を伴い、組紐や韋紐(かわひも)で小札(こざね)を威(おど)している。兜は天辺(てへん)の孔(あな)が大きい厳星(いがぼし)の兜といわれるものである。

鎌倉時代 原品：青梅市御嶽神社 国宝

16 伝源頼朝像 (複製)

鎌倉時代
原品：
東京国立博物館
重要文化財

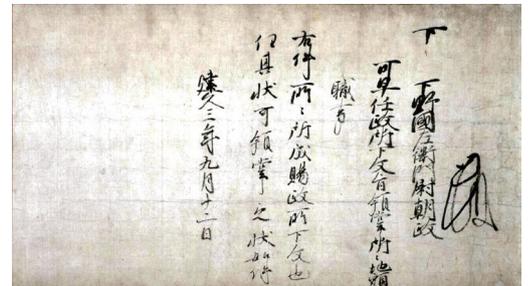
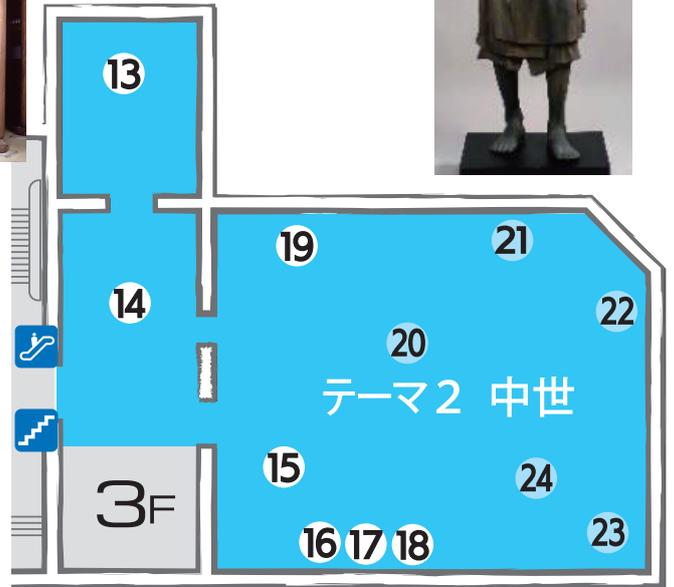


本像は、立烏帽子(たてえぼし)をかぶり、狩衣(かりぎぬ)、指貫(さしぬき)を着け、笏(しゃく)を執(と)る強装束(こわしようぞく)の姿で、鶴岡八幡宮白旗社の御神体であったと伝えられる。

19 一遍上人立像 (複製)

一遍上人は浄土宗の一派、時衆の開祖。踊り念仏や念仏札を配る賦算(ふさん)をおこなった。本像は一遍が念仏を唱えながら歩く姿をとらえたもので、その宗風(しゅうふう)をよく表した迫真的な肖像彫刻である。

鎌倉時代
原品：相模原市 無量光寺



そではんくだしびみ

17 源頼朝袖判下文

源頼朝が、下野国の御家人小山朝政を地頭職に任命した下文。すでに政所職員の署名による下文が発給されていたが、当時の御家人は、頼朝自身の花押を求めた。鎌倉時代 建久3年(1192)



18 御成敗式目 (写本)

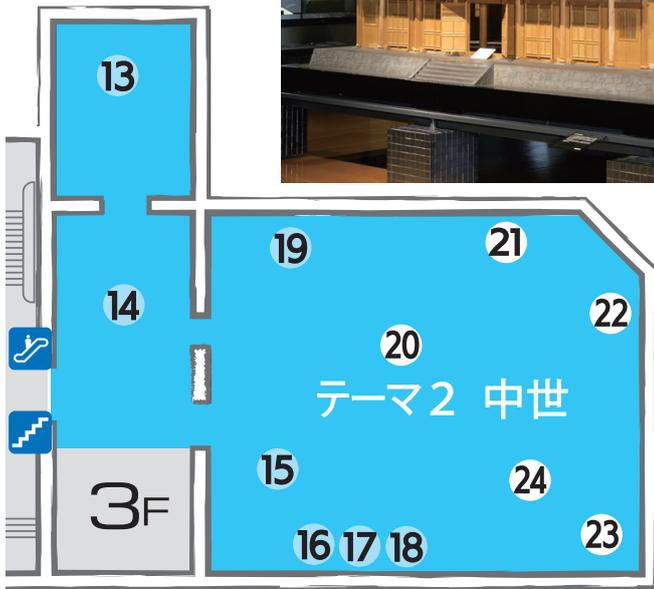
貞永元年(1232)に成立した51箇条からなる幕府の基本法典。第三条は「一、諸国守護人奉行事」で、守護が職務として遂行すべき事項を定めている。そのひとつ、「大番催促」は御家人に課せられている京都護衛の任務を指揮・監督する権限。これに「謀反人」の追捕(つひぶ)と「殺害人」の追捕をあわせて「大犯三力条」といった。

室町時代



⑳ 円覚寺仏殿（復元模型）

この模型は、円覚寺の大工をつとめた高階（たかしな）家に伝わった元亀（げんき）4年（1573）の円覚寺仏殿再建計画の図面をもとに復元製作されたもの。禅宗様建築の典型を示している。方5間裳階（もこし）付（外観の柱間は7間）という規模は、現存する禅宗様建築をはるかにしのぐ大きさで、中世鎌倉における五山寺院の壮大な伽藍を想像させる。



㉑ 青磁などの輸入陶磁器

宋や元から輸入された「唐物（からもの）」と呼ばれる工芸品の数々は、中世の人びとのあこがれの的であった。青磁や白磁は日本では生産できず、その美しい色つやの、華瓶（けびょう）や香炉、碗、壺、瓶子（へいし）といった珍しい器物が、人びとを魅了した。また、漆地に文様を彫った堆朱（ついしゅ）や堆黒（ついこく）といった彫漆器（ちょうしっき）も、香合（こうごう）や盆などがもたらされ、珍重された。

㉓ 北条早雲画像（複製）



北条早雲とは近世以降の俗称で、正しくは伊勢新九郎、実名は盛時、出家後は早雲庵宗瑞（そうらんあんそうずい）と称した。京都伊勢氏の庶流で、駿河の今川家内で頭角をあらわし、伊豆を攻め取り、小田原を攻略して相模進出を果たした。つづいて三浦氏を滅ぼし、相模支配をなしとげた。永正16年（1519）、伊豆の葦山で波乱に満ちた生涯を閉じた。

室町時代 原本 箱根町早雲寺 重要文化財



㉒ 宋銭

鎌倉では貨幣経済が発達し銭が使用された。しかし中世の日本では貨幣の鑄造は行われず、中国の貨幣がそのまま使われた。昭和30年（1955）、鎌倉市腰越浄泉寺前の道路工事の際、約12,000枚の大量の古銭が発見された。北宋と南宋の貨幣が大部分を占めていたが、唐、金、元、明の貨幣も含まれていた。

鎌倉時代 鎌倉市 浄泉寺出土



㉔ 山中城模型

静岡県三島市山中新田に後北条氏によって築かれた城である。天正15年（1587）ころより豊臣秀吉との緊張が高まると、城は拡張され、小田原城の西方の防衛拠点と位置づけられた。三方を土塁で囲んだ曲輪（くるわ）、障子堀（しょうじぼり）（畝堀（うねぼり））と呼ばれる堀底の通行を妨げる畝を設けた空堀など、特徴的な後北条氏の築城法を見ることができる。



26 相州小田原の絵図

小田原藩は、稲葉正則の時代に藩政の整備が進んだ。小田原城の再建もすすめられ、寛永9年(1632)からおよそ50年間にわたって大改修された。城下町も再整備され、東海道に面した地区を町人地とし、それを取り囲むように武家地が配された。宿場の中心地には本陣や脇本陣、問屋場、高札場などが設けられ、大小の旅籠(はたご)が軒を連ねた。



28 相武の名所 浮世絵

名所とは、「名のある所」の意味であったが、江戸時代には景勝地や旧跡などを指す言葉になっていた。相武の地には、景勝地として名高い金沢八景、古い歴史を誇る鎌倉、湯治場として知られる箱根、霊地として信仰を集めていた江ノ島や大山など、バラエティーに富む名所があった。江戸近郊の遊山の地として多くの人びとを集めた。

25 東海道 浮世絵

宿場の第一の役割は伝馬役を勤めることであり、そのため人馬の常備が義務付けられていた。宿場には問屋場がおかれ、宿役人が、公用書状の継ぎ送り人馬を継ぎ立て助郷賦課(すけごうふか)などの業務をおこなった。宿泊施設は、大名や公家、公用旅人が泊まる本陣・脇本陣、一般の旅人が泊まる旅籠や木賃宿があった。



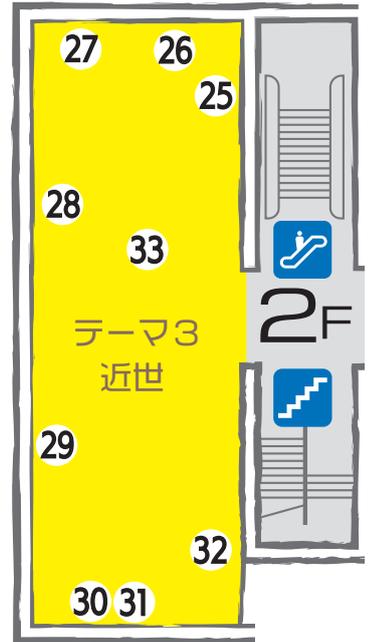
27 関所手形

箱根関所は関東の出入り口として最重要の関所に位置付けられて厳重に警備された。人びとの手形改めをおこない、江戸への鉄砲の持ち込みと、大名の妻子の逃亡を防ぐために「入り鉄砲と出女」を厳重に取り締まった。鉄砲改めは後には新居関所(静岡県湖西市)でおこなうようになり、箱根ではもっぱら「出女」の取り締まりを行った。

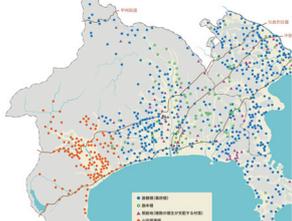


30 五人組帳・宗門人別帳

江戸時代の村は、村役人(名主、組頭、百姓代)を中心とした行政的組織で運営されていた。領主からの命令の伝達や年貢諸役の割り当てなどは、この運営機構を通じておこなわれた。その他に「組」や「講」とよばれる小地域単位の組織もあった。「五人組」は年貢の納入や治安維持の連帯責任を負うなど、支配を補完する組織であったが、「講」は共同作業や冠婚葬祭などで、互いに協力し合うものだった。「村八分」という制裁は、小地域単位の組織からも付き合いを断絶されるものであった。



家康入封時の所領分布図(天正18~20年:1590~92年)



29 所領分布図

天正18年(1590)徳川家康は江戸の防備を考慮して領国経営を始めた。神奈川県域では小田原城に腹心の久保忠世を入れ、その他の地域は大部分を直轄領と旗本領とした。享保7年(1722)に金沢藩(六浦藩)、天明3年(1783)には荻野山中藩など、新たな藩領も生まれたが、基本は江戸時代を通じて変わらなかった。



31 キリシタン禁制の高札

幕府や藩は施策の公布やその周知徹底をはかるため高札を掲げた。江戸時代を通してさまざまなものが出されたが、村では、放火犯の密告を奨励する「火札」、徒党・強訴・逃散を禁ずる「徒党札」、キリスト教禁止と隠れキリシタンの密告を奨(すす)める「切支丹札」の3枚が基本であった。高札場は村や宿駅の中心部に設定された。



32 神奈川の物産

様々な産物に恵まれた相武は大消費地江戸の需要を支えていた。とりわけ蔬菜(そさい)や果実、水産物などの生鮮食料品の供給地として重要な地域であった。初鯉や鮎は将軍にも献上された。この他、建築資材とし重用された根府川(ねぶかわ)石、小田原藩から將軍家献上となった青苧(あおそ)、愛甲郡(あいこうぐん)半原(はんばら)の絹糸など、名産として江戸までよく知られた産物も少なくない。



33 江戸時代の旅道具

江戸時代の旅は、身分の高い者を除けば、徒歩での移動が基本であった。そのため旅道具は携行に便利なように小型化、軽量化が工夫された。脚半、足袋、浴衣などの衣類は小さな行李に入れて担ぎ、その他の携行品も雨具や防寒具、葉・煙草入れや小物入れ、弁当箱、手ぬぐいや風呂敷、袋類、提灯、旅案内書等、必要最小限の物に限られた。



34 カノン砲（複製）

18世紀末以降、幕府は無防備状態だった江戸内湾に台場を築き、大砲を配備した。しかし、性能の面でも数の面でも異国船を撃退するには十分なものではなかった。展示されているのは安政元年（1854）、湯島馬場大筒鑄立場で鑄造された青銅製の野戦用大砲である。ペリーの再来航に備え、新たに築造された品川台場に備えつけられていた。

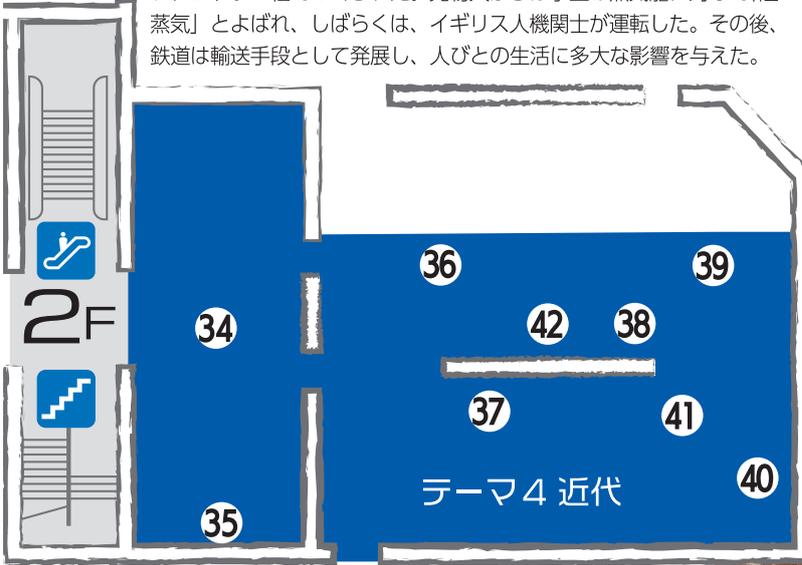
原品：靖国神社遊就館所蔵



39

1号機関車（模型）

鉄道が開通した明治5年（1872）、使用された機関車の中の1号機を1号機関車とよぶ。この機関車は1871年にイギリスのパルカン・ファンドリー社でつくられた。見物人からは水上の蒸気船に対して「陸蒸気」とよばれ、しばらくは、イギリス人機関士が運転した。その後、鉄道は輸送手段として発展し、人びとの生活に多大な影響を与えた。



38 シャぐま

新政府軍が陣笠の代わりにかぶったもので、威嚇、防寒、防暑、防湿のために用いられたと思われる。布にヤクの毛を植えこんだもので、赤色は土佐藩、白色は長州藩、黒色は薩摩藩というように、各藩で色を染め分けていた。江戸時代末期～明治時代



くたいれんが

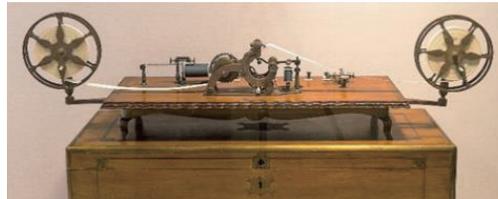
40 出土した建物躯体煉瓦

県庁新庁舎敷地内の地中から平成29年（2017）に発見された、石川組本社建物のものと考えられる躯体煉瓦。石川組は、明治45年（1912）に設立された港湾荷役会社で、本社建物は、大正9年（1920）の竣工とされる。煉瓦造3階（一部4階）地下1階建てで、1階の腰壁と各階の窓まわりは石張りであった。煉瓦の一部は表面が黒変している。



35 ペリーの肖像

嘉永6年（1853）6月、ペリー艦隊は地球を4分の3周する大遠征のすえ、浦賀に来航した。人びとは幕府の禁令を無視して見物に出かけ、ペリーや黒船を題材にした瓦版・錦絵なども多数出回った。その中には、ペリー本人とは似ても似つかない肖像画も描かれた。



37 エンボッシング・モールス電信機（複製）

嘉永7年（1854）、ペリーから将軍へ贈られた品の一つ。西洋の技術力を誇示することも目的であった。応接所（現在の県庁付近）と約900メートル離れた名主・中山吉左衛門宅（現在の当館付近）との間で公開電信実験が行われた。

19世紀 原品：郵政博物館 重要文化財



36 黒船（模型）

もともと黒船とは、「鎖国」以前にも来航していた黒いタール塗りのポルトガル船などの異国船を指していた。ペリーが率いてきた蒸気船は、これまで鎖国下の日本人が目にしたこともないほど巨大であった。武装した船体の外輪を回し、海流や風向きの影響を受けずに航行する様子は、日本人にとって驚異的であった。「黒船」は当時の西洋技術の結晶であり、西洋文明の象徴として人びとはみていたのである。



41 横浜居留地の模型

日本大通りを中心とし、東側の外国人居留地、西側の日本人居住区の一部を入れて製作した。現在、ここに展示されているのは、神奈川県庁や英国領事館などがある官庁街とジャーディンマセソン商会などを含む外国人居留地で、全体の3分の2にあたる。



42 神奈川の民権結社

明治11年（1878）以降、神奈川県内には明治10年代に限定しても現在判明しているだけで102の民権結社が組織されていた。このうち当時神奈川県に含まれていた三多摩地域にあった結社は45にのぼり、全結社の半数近くが集中していた。また都市部である横浜（明治22年より横浜市）にも有力な結社が設立された。

④③ 道祖神

サイノカミ（塞の神）ともいわれ、村境や道の辻などに祀られ、境界を守護し、外から侵入する邪霊悪鬼を防ぐ神として信仰されてきた。正月 15 日に門松などを道祖神の前で燃やす小正月の火祭りなどと習合している。ご神体は、その形態から文字碑型、単体像型、双体像型、僧形（そうぎょう）坐像型、丸石・五輪石・陰陽石型の 5 タイプに分類できる。



④④ 農具

鍬（くわ）は使用する地域の地形や土質の違いによって、柄の角度や長さが異なっており、江戸時代の『農具便利論』にも「鍬は国ぐにをして三里をへだてずして違う」と述べられている。それは、何代にもわたってそれぞれの土地に適した使いやすい形状をつくってきたからである。昭和初期ころから多くの農具は、大量生産によって、全国的に画一化されてきた。こうした中で、鍬は現在でも地域性のみられる農具の一つである。



④⑤ 神奈川の伝統工芸

小田原・箱根地方に伝わる工芸品には小田原漆器と、いわゆる箱根細工と呼ばれる寄木（よせぎ）・木象嵌（もくぞうがん）・組木細工などがある。小田原漆器の起源は、室町時代の中期とされ、箱根細工の中の組子細工や豆茶器玩具などの木地（きじ）製品に影響を与えている。これらは江戸時代に東海道を行き交う人びとや、箱根への湯治客のみやげ物として広く知れわたった。なお、木象嵌と組子細工は明治時代中期ころに考案された技法である。



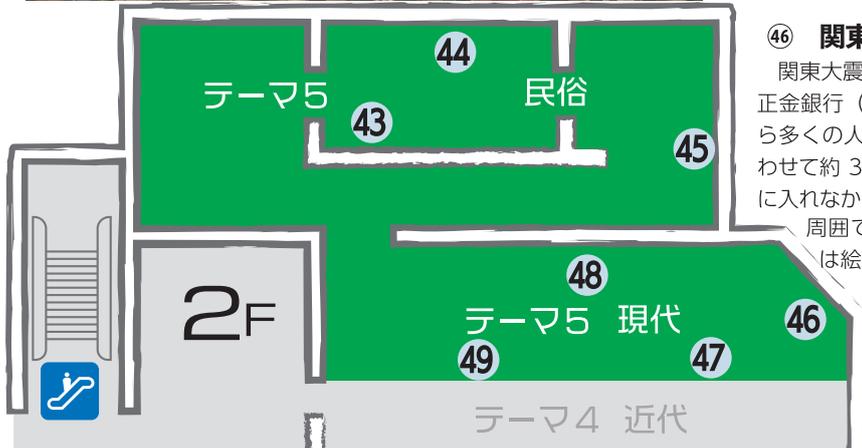
④⑥ 関東大震災

関東大震災の際に、地震で倒壊しなかった横浜正金銀行（現在の歴史博物館）には、地震直後から多くの人びとが避難してきた。行員、避難者あわせて約 340 人は地下室で猛火を避けたが、行内に入れなかった約 140 名もの人たちは銀行の周囲で命を落とした。その惨状は絵葉書などによってよく知られていた。



④⑦ ちゃぶ台

関東大震災後の急速な都市化によって、会社員などのいわゆる中間層を中心に「モダン生活」という生活様式が広がった。電灯の下でちゃぶ台を囲んでの食事風景が一般的となり、扇風機などの電化製品も普及した。ダンスホールやカフェー、円タクなどの文化現象がみられ、アメリカ映画から抜け出たような服装で街を闊歩するモボ（モダンボーイ）やモガ（モダンガール）が注目を集めた。庶民の洋装化は、この頃から定着し始める。



④⑨ 焼夷弾

M69 焼夷弾は、長さ 51 cm の六角柱をしており、アメリカ軍はこれを 38 発束ねたクラスター爆弾として投下、上空で分離し一斉に地上へ降り注いだ。昭和 20 年（1945）5 月 29 日の横浜大空襲では B-29 など 618 機が来襲、午前 9 時 20 分頃から 1 時間余りの間に焼夷弾 43 万 8,576 個（2,569.6 t）を投下した。市民は火と煙に追われて逃げ惑い、中区、南区、西区、神奈川区を中心に横浜市街は焦土と化した。この日の死者・行方不明者は 3,959 人、重軽傷者は 10,198 人であった。



④⑧ 昭和の冷蔵庫

東芝と、前身の芝浦製作所が製造した冷蔵庫。右側の SS-1900 は、芝浦製作所が開発した国産の電気冷蔵庫第 1 号の後継機。富裕層やレストランなどで利用され、一般家庭には普及していなかった。また、左側の GR-120TS が発売された当時、冷蔵庫の普及率は約 3 割だった。



⑤⑩ 横浜正金銀行（表紙）

東芝未来科学館寄贈